

## 課題の本質を掘り下げる その時に必要な最適解を導く



**岡部 修三**  
Shuzo OKABE

建築家／upsetters architects 主宰

<http://upsetters.jp>

ら、様々なデザイン事務所にインター  
ンとしてお世話をなりました。しかし  
そこでは、クライアントから依頼され  
たプロジェクトをどれだけ面白く、ま  
た充実したものにするかの話が中心  
で、「社会に対して提案をしたい」とい  
う当時の私の興味とはギャップがあ  
りました。

岡部修三氏は2004年の会社設立  
以来、世界7カ国、200を超えるプロ  
ジェクトを成功させてきました。幅  
広い活動を展開しながらも、デザイン  
で何ができるかという問いかけを失  
うことはありません。建築家あるいは  
デザイナーとして「できるだけ純  
粋に社会に対する提案性を持ち続け  
たい」、その思いは強まるばかりです。

### 在学中に設計した

#### レコードショップからスタート

学生時代からファッショングや音楽  
などカルチャー全般が好きで、そのこ  
とがデザインに興味を持つきっかけ  
になつていています。大学時代は  
野球漬けの毎日でしたが、そうした  
日々の中でも特に音楽にのめり込み、  
世界中のマーケットでレコードを  
買って日本のお店に卸すといったアル

バイトもやつていました。音楽などの  
カルチャーは人の生活に密接に関  
わついて、まさに社会の鏡といえま  
す。例えば差別や偏見があればそれ  
を跳ね返すように力強い音楽や  
ファッショングが生まれることがありま  
す。カルチャーを通じて次第にデザイ  
ンへの興味が深まり、社会を変えてい  
くような力や可能性を秘めたデザイ  
ンというものを一生の仕事にしていき  
たいと思うようになりました。

デザインを仕事にすると考えた時  
に、社会との接点が多く、それでいて  
デザインが好きだつたり詳しかつた  
りする人以外を対象にした方が面白  
いことができる」と考え、大学院に進  
学して建築を学ぶことを決断しまし  
た。これがデザイナーとしての第一歩  
だつたのかなと思います。

大学院でデザインの勉強をしながら

ることがプラスとなりコミュニケー  
ションを誘発するような環境設計を  
提案しました。

この店舗がいろいろな雑誌などで  
取り上げられ、それを見た人から仕  
事の依頼がくるようになりました。  
まだ在学中だったので、活動して  
いくことに可能性を感じて「upsetters  
architects」を立ち上げました。

### デザインとストラテジー

#### その融合を目指して

私自身は建築家としての活動を主  
業としており、店舗や住宅の建築を  
数多く手がけていますが、それだけで  
はなく企業のブランド設計や地域の  
産業活性化の仕組みづくりなど、デ  
ザインに対する総合的な取り組みも  
行っています。

本来、建築家というのは社会に対  
して建築もしくは環境を通じて新し  
い価値観や気づきといった提案性を  
もてる人だと私は思っています。しか  
し、いわゆる建築家という仕事は、与  
えられた依頼に対してもどのようなデ  
ザインを返せるか、どんな新しさを打  
ち出せるかという話になります。

当然ながらそれも重要なことではあ  
りますが、その前提となる課題の本  
質を無視することはできません。例  
えばレストランを建築する際も、見た  
目の美しさだけを追求するのではなく  
く、その場所にどんな歴史があり、ど  
のような人たちが集まり、そこから  
どんな文化が発信できるかといった  
プロジェクトの前段部分についても  
しっかりと考えながらデザインする  
ことが重要だと考えています。結果、

そうしたアプローチをとることで、事  
業としての可能性が広がるとも思つ  
ています。そのデザインの対象が最終  
的にハードになれば建築となります  
が、それ以上にブランド構築が重要と  
いう場合は、そちらを優先して行い  
ます。何をデザインするべきかをしつ  
かりと考え、その時に最も必要であ  
る最適解へと導いていく。そこに重点  
を置いているため、建築以外の様々な  
デザインに携わることは、むしろ自然  
なことだと考えています。

現在、私たちが主に取り組んでい  
ることは、大きく2つに分けられます。  
一つは建築やプロダクトなどのい  
わゆるデザイン業務です。そしてもう  
一つがストラテジ業務とよんでいる  
もので、何をどのようにつくるべきか  
ということも含めて総合的な戦略と

### ■おかべ しゅうぞう プロフィール

建築家／upsetters architects 主宰

#### 略歴

2005年慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 環境デザイナープログラム 修士課程修了。

2004年より upsetters architects 主宰。「新しい時代のための環境」を目指して、建築的な思考に基づく環境デザインと、ビジョンと事業性の両立のためのストラテジデザインを行なう。

2014年よりブランド構築に特化した LED enterprise 代表、グローバル戦略のためのアメリカ法人 New York Design Lab. 代表を兼任。

JCDデザイン賞金賞、グッドデザイン賞、iFデザイン賞など、国内外での受賞歴多数。

著書に「upsetters architects 2004-2014,15,16,17」(2018年、upsetters inc.)、共著に「ゼロ年代 11人のデザイン作法」(2012年、六耀社)、「アーキテクトプラス“設計周辺”を巻き込む」(2019年、ユウブックス)がある。



①



②

砥部焼として引き継がれてきた形や色を基準としつつ、現代の生活に馴染む様にデザインした「スタンダードシリーズ 01」。



砥部の産地を代表する作家である八瑞窯の白瀬八洲彦さんの手捺りによる「SK STOOL」。プロダクトを通して希少な技術と経験を次の世代へつなぐ活動。



PELLICO Tokyo Midtown



④



PELLICO Tokyo Midtown Hibiya



Yusuke Wakabayashi

①FSX 創業50年の老舗(旧)藤波タオルサービス株式会社の社名変更及び、CI(コーポレート・アイデンティティ)の刷新に伴うストラテジーデザイン及びディレクション。

②ShiroAo 愛媛県の伝統的なやきもの「砥部焼」の可能性を探求するプロジェクト。2013年の立ち上げからディレクション及びデザインを担当。2018年ブランドを引き取り事業会社として株式会社白青を設立。

③PELLICO イタリアのシーザーズブランド「PELLICO」における、ブランドストラテジ及び、東京ミッドタウンと、東京ミッドタウン日比谷の2つの旗艦店のデザイン。

④KADAR TERRACE KINAIKI 完成イメージ 岩手県二戸市で取り組む、温泉と宿泊の複合施設。隣接する都市公園と合わせて、マスター・アーキテクトとしての総合的なディレクション及び、施設、公園の設計を担当。2022年4月完成予定。

⑤超福祉展 障害者をはじめとするマイノリティや福祉そのものに対する「心のバリア」を取り除こうと開催している展示会のストラテジーデザイン及び会場デザイン。初回の2014年から7年間、企画立案にも関わりながら「福祉」のイメージを変えるべく奔走。

「デイレクションを行い、ビジョンの達成と事業性の両立を目指しています。コンサルタントと近いのですが、より具体的な着地までを見据えながら考えていくという部分で異なると考えています。もちろん、その2つの役割が融合することも少なくありません。例えば最近のプロジェクトとして、岩手県二戸市で温泉と宿泊施設、そして隣接する公園のデザインに取り組んでいます。行政と民間が共同で行う事業になるため、両者が協力して取り組むための基本政策に関わった後、その先の建築や公園などの設計も担当していく、それぞれがビジョンを共有しながら街づくりに取り組んでいます。公共的なプロジェクトに対しても、私たちが考えてきたデザインと戦略の両方を合わせた関わりができるようになってきたことに、手応えを感じています。

「誰からも頼まれないこと」にデザイナーとして関わっていくこれから先を見据えた取り組みとして、現在は2つの方向を試しているところです。1つはプロジェクトに自ら投資することでもう一歩踏み込んだデザインを開拓させていくとい

うなノンプロフィット領域に対するアプローチです。私たちが取り組んでいるデザインは、それが公共の仕事であつたとしても、事業性を持つことで成り立っています。そのため、よい社会を作る上で必要なことであつても事業的に成立しなければ続けていけません。一方、本来事業性を超えて取り組むべき課題は社会には多くあります。ですが、国もそうしたこととに投資するだけの余裕がない状態です。

例えは福祉の分野などはまさにそうで、全ての課題を行政がサポートすることは、予算や人材など様々理由から難しいと思います。もちろん、そうした分野にデザインを活用することで事業性を持たせることができます」と信じていますが、やはりそれだけでは到達できない部分も見えてきてしまいます。しかし、誰も頼まないのはどうしても感じてしまいます。デザイナーが前に出すぎるということによつてプロジェクトの特性を消してしまって、プロジェクトの特性を消してしまつて、そういうマイナス面もあるかもしれません。なぜ、例えはクライアントと共同事業のような形で取り組んだ場合、どのようなメリットを打ち出せるか、そうしたトライアルも行つていきたいと考えています。

もう1つは、利益を追求しないようなノンプロフィット領域に対するアプローチです。私たちが取り組んでいるデザインは、それが公共の仕事であつたとしても、事業性を持つことで成り立っています。そのため、よい社会を作ることだと思うのです。

これまで様々な事業に取り組む中で、どのようにデザインを活用すれば商業的に成立するかは、ある程度見えてきました。もちろん、それを深めたり極めたりするためには、まだ磨いていく部分はたくさんあります。一方で、「誰からも頼まれないこと」をどのように成立させたいかといった視点も必要になつてくると思います。そうしたことに対しても自分は一体何ができるのか、デザイナーとして最も興味があり、そして今後より一層力を注いでいきたいと強く思っています。